
透明熊の手

Y-m a

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

透明熊の手

【Nコード】

N0317Y

【作者名】

Y - m a

【あらすじ】

自分のことを猛者と名乗る凄腕霊媒師、しんきち厳吉は、とある理由で必要となった霊媒師の必需品、透明熊の手を探しに山へ入ったのだが、そこには冥界へ通じる穴が空いていた

壱

縁起を担いだのに、うまく行かなかった…

と思ったら、実は良い出来事が起きていた…

そんな気分だ

「人が死ぬとはどういうことだったか？」

私は厳吉ごんきち霊媒師をやっている

霊力は凄まじく山彦に英訳させたりできるほどだが…

人は現金なものだ

「なっ？英訳されたら？私のヤッホーがハローになったら？と再三尋ねてやっ。はい、わかりました。と来た…」

山彦より出来が悪いんじゃないか？

まあ…諭えが悪かったな…とにかく霊力は凄まじいのだ…

そんな私がセーラー服を纏った老年のジジイの死体に出会した…

可哀想に痩せこけた足が、最初いやらしく見えたが、自ら頭を小突いて目を覚ました…

このジジイは何が狙いだっただのか？

勃起はない…断じてない！！

私は透明熊の手という霊媒師の必需品を探しに山に登ったのだが…

私の目からは霊媒師ゆえ、死んでいると分かるのだが…

いったい私を発見者と純に見る奴はいるだろうか？

「目を覚ませっ！！変態が！！」

私は霊媒師としてではなく、人として話しかけた

しかし、良い兆しだ

透明熊の手はこの辺りにある

貳

「ん…ん…はて？私はここで何をしていたんだ？」

馬鹿なことがあった。私の選別眼を覆すようにジジイが目を覚ましたのだ

まるで、女子高生と魂が入れ替わったかのような寝ぼけ眼でジジイは私を発見した

「はて？じゃないだろう？何という格好をしているんだ？」

ジジイは辺りを見回し、私を見た…

「て、天狗か？」

ま、まあ無理もない

私も霊媒師の端くれ格好は天狗のやうだが…いやいや、高能たる霊媒師所以の立ち振る舞いぞ？

してやるか？

「そうだっ！！私はこの霊峰を司る天狗である…どれ？何か業を見せようか？」

「いえ…私は本物の天狗にまだ死んでは駄目だと蘇らされましたか
ら…お腹一杯なんです。」

ジジイは首を縦には振らなんだ…

何？本物の天狗だと？
確かに「天狗のやうなもの」と「本物の天狗」では、信憑性が甚だ
違うのだが…

「風よ吹けっ！！」

私はジジイの意見に関係なく風を起こした

突風はジジイを天高く舞い上げ、そして、地面に叩きつけた

ジジイはまた…動かなくなった…

参

ジジイは動かなくなったが、それでいい…
元々そうだったのだから、指針がイカれてしまつよりはいいんだ…

透明熊の手は山が正常でないと現れないのだ

信号機のように赤青黄色と規則性がないわけじゃないが、あるとも
言い難い

しかし、正常でないと現れないのだ

「うっ、うっ…痛い…腰が痛い…」

また馬鹿なことになった…

ジジイの奴が死んでなかったのだ…

「お、おい…いい加減にしろよ？変態め…冥界の天狗とやらが私にイヤがらせでもしてるんじゃないか？」

ジジイは恨めしそうに私を見た

「冥界の天狗などと名乗った覚えはない…しかし、おまえはいつ覚えるのだ？透明熊の手は私が手渡す寸法だろ？」

はっ！！

思い出した…飽き飽きするほどの現実だった
セーラー服を来たジジイが透明熊の手など霊媒師グッズを与えてくれていることに…

「はっはははっ…すっかりセーラー服に気を取られてしまって…そうだそうだ…あなたから透明熊の手を受け取るんだったか。ありがとうや、ありがたや…して、透明熊の手とは何だったか？」

怪訝な表情を露わにし、ジジイはゆっくり口を開いた

「ほれ？手を出せ」

言われるままに手を出した

パチンッ

私はジジイとタッチをした…途端に目の前に天狗が現れた

いや…人間か？

「痛い…腰が痛い…」

腰が痛いし、目線が座り込んだように低い

「ダハハハッおまえなんて格好だ！次の天狗が来るまでに透明熊の手を準備しとくんだな？さらばだっ！！」

天狗が…巖吉が…私がつっていった…

空が不規則にグルグル回る…ああ…私は誰になったのか？

虚ろな眼はやがて闇を探し始めた

肆

透明熊の手とは本来、天照大神の許諾なしには生まれたい契約であるのだが、冥界にはどうやら別の方法があるようだ…

「天照大神は一定した価値観をお持ちだからな…身を換えるように冥界を生き抜けば、その力を自由にできるときが一刻だけあるんだ…」

独り言のようにスルスルと疑問の答えがでた
私が発した言葉だが、はてさて…冥界が呼んでいるのか

私の体は言うことを聞かない…いや、よく聞いて考えているやうだ…
全く動かない

セーラー服を脱ぎたい衝動に駆られたが、体中がむず痒くなる感覚に襲われたが…それ以上の絶望が考えを巡らせていた

「あーっなるほど…つまり、この体の主は冥界の力を借りて本来私譲り受けるべき透明熊の手を横取りしたわけか…」

読めたぞ…

あのジジイは確か冥界で天狗と会っていたな…

本来ならば、私とその天狗と透明熊の手を介し体を入れ替える寸法だったわけだな…

「まったく…目印のくせに出しゃばりやがって…」

と言いながらも、私は意に知れない安堵感に少しずつ癒され始めていた

森の息づかいや体にそっと添えられた幾枚かの葉っぱ…体さえ戻れば、言霊を操り一祭り起こせるのに…

あのジジイはどこへ消えたんだ？

伍

入れ替わった意識がやがて体に馴染んでくる…
恐ろしいほどにだ

どうしたらいいんだ？このままではセーラー服を来た怪しい痩せっ
ぽうちのジジイになってしまっ…

まるで…私が初めからここに倒れていたみたいだ…

まさか…

「そついでに何か…」

弱くなった自尊心がやがてもっともらしい憶測を呼んだ

つまりだ。最初から二つの意識が存在し、天狗を仲介人として定期的に入れ替わっていたとしたら？

私の記憶が浮き上がって、錯誤していた点も俗世に揉まれたが故だとしたら？

その二つの意識を自由に切り替える主導権を所有しているのは…

「冥界にある天狗というわけか…透明熊の手と言っわけだが…如何せん腑に落ちん…まだまだ私は目が黒いままだっ…だが」

私はまるで、このセーラー服を着たジジイの人生を辿るかのような屈辱感に苛まれながらも、決意した

冥界へ…私は冥界へ行かねばならない…逝かねば…

陸

冥界…冥界とは何だろうか？

人は楽しい時間ほど早く感じ、苦しい時間ほど長く感じるものだが…

冥界は文字通り地獄…

愛を語れば、その分体の自由が奪われる場所だ

極楽とは違う…

冥界の天狗とは何だろうか？

どうやってこのジジイは冥界から蘇ったんだ？

「一度死ななければならぬのか？」

いや…それでは芸がない。と言うよりそのまま意識が消滅してしまつたらどうする？

一体どうやって冥界へ逝ったのか？

冥界の天狗はすでに役目を終え、次の場所へ去ってしまったのかも
しれない…

「弱気になるなっ！！私は必ず…冥界の天狗になってみせる！！」

力ない、か細い声だったが、しっかりとした覇気を帯びていた…

「しかし、このまま寝たきりの方が良いのか…一度自由になり自分の
体を探すべきなのか…」

さて、私の体は動くだろうか？

漆

「フハハハッ戻ってきてやったぞ？貴様のことだ。俗世に揉まれ記憶を無くし、透明熊の手を貴様と交わすとても思っていたんだろう…当たり前だ…私に思い残すことはない…。記憶など無くても良い…」

私の体が戻ってきた…

意外というか

私はまた力が抜けていくのを感じた

「ど…どうということだ？私の霊力では本物の天狗には適わないというのか？」

絞り出すように声を出した…

「娘に会いたくてな…時空を遡っていたんだよ…しかし、遡りすぎた…この時代には娘は疎か、私さえも産まれていない…元居た時代に帰らねば…」

それはそうだ

私の生まれた時代はまだ戦国時代

人の業に嫌気がさして未来に何度も足を運んだものだ…

セーラー服なるものも承知しているが…

男が着るものではない…

「どちらにせよ。その体は返ってくるのだな…お前も霊媒師なのか？」

男は少し困った顔をした…

「霊媒師？まあ…似たようなものだよ…エスパーさ…ほら、手をだしな？」

私とジジイはこうして二度目の透明熊の手を交わした

捌

やっと？自分の体が戻ってきた…
ホッとしたのも束の間、透明熊の手が与えてくれる暖かい副作用を
私は忘れない…

どんな名医も患者の心の痛みまでは理解し得ないと言っが…

私にはわかる…このセーラー服を着たジジイが心に仕舞って置いた
痛みが…

「お前の娘…破裂したのか？」

ジジイは涙を流した…

破裂したのか？だって？普通なら冗談の類に片付けられそうだが…

笑う奴もいるだろう…

しかし、今の私にはわかる

「私の娘は私よりも数段強力なエスパーだった…しかし、それ故に力のコントロールが利かず…破裂した…ううっ…笑ってくれても良い…こんな話できるもんじゃない…」

力ない声はより一層増し、私の記憶と心を繋いだ…

少しの安堵感からか、笑いがこみ上げては来たが…忘れられない感情がある…

「笑うわけあるかつ！惜しいことをしたんだろ？娘をもつと厳しく育てられたら破裂することもなかったんだろ？！悔しいだろ？絶対娘に会え！！助かるかもしれないだろ？」

ジジイはさらに泣き出した

「ううっありがとっ…」の時代では存在しているのがやっとのみっ
だ…きつと娘の破裂を食い止めてみせるよ…」

そう言ってジジイは風のよつにこの戦国時代から姿を消した…

「へへっ…格好付けやがって…」

云いようのない気持ちよさが私の霊力をまた一つ強く鍛えてくれた
ようだ…

玖

一段落着いたか…

わたしはそうだ…本物の天狗になるために透明熊の手を探していたんだっとな

「んっ？」

あのジジイの居た場所にセーラー服を着た…今度は女だ…

仰向けに倒れている

まさかっ

「先程は父がお世話になりました…私が先のエスパーの娘に当たる…ヨシコと申しまして…」

ヨシコさんか…

現れたか…

「はてさて、この戦乱の世でまた、何をなさっているのか？あなたの父君の成果であるのかな？まだ現世に身はあるようだか？」

ヨシコと名乗る女はしくしく泣き始めた

「ええ…父は…私を守るためにセーラー服でタイムトラベルをし、
国一番の恥曝しになりました…それ故、超能力の制御ができず破裂
してしまいました…」

そ、そうだったのか…
それでセーラー服でタイムトラベルを…

って、待てよ…
セーラー服を女が着たとて恥になるものか？
他に意味があるのか？

「国一番の恥曝しに…か…それではヨシコさんとやらが次の恥曝しにならなければ父君は破裂してしまうと言っわけかな？」

ヨシコさんはまたしくしく泣き始めた…
余程思い詰めていたんだろう

「わからないんですっ！父が最後に残した言葉、私のように生きなさい。という言葉…これだけが頼りだった…ううっ…様々な血筋から口伝された父の面影が私に当て付けられ、死ぬ思いでした…私は国一番の恥曝しの娘と…」

うーむ…これは一筋縄では行きそうにないな…
あのジジイがそんなことを考えていたとは…

「でも…唯一あなただけが…あなた様だけが、父の愚行を口伝化していなかった愛しき人だったのです…だから、真っ先にこの時代に来ました…」

あのジジイからできた娘にしては若すぎるが…

私はどっちら頼られているようだな

壹拾零

しかし…娘も娘か？

この時代で未来の人間は身動きがとれないのか？

「や、疾しい気持ちはないが…そうだな…全く案がないわけではな
いんだ…」

いきなりすぎたか、娘はサッと股を閉じた…

いきり立ちそうなのを堪えながらも、私は無きにしも非ずの案につ
いて話し始めた

「そう警戒せんでくれ…良いか？私達、霊媒師の中では当たり前
のように行われている、送り火と言う風習…お前達の力が霊力の類で

あるなら、有り余る靈力を他の者に分け与えると良いんだ…何も破裂するまで蓄積さす必要はないだろ？」

娘は涙も枯れ、何とか場の悪いことになってしまったが…暫し私は返事を待った

「……送り火ですか？チャリティーのように力を、…超能力を他者に分け与えると言うことで善いのでしょうか？果たしてうまく行くかどうか…私や父のような先天的なエスパーでないと…品位に欠けると言いますか…」

あまり乗り気ではないようだ…
しかし、破裂するよりは善いだろう？

「品位か…分からなくもないが、破裂して肉体が滅ぶよりは得策だ
と思うがね？」

少しの沈黙とともに、山の空気が変わったことに私も気付いた…

やばいつ…

こいつはもしかすると…透明熊がでるか？

「私一人では決めかねます。母や…父が生きている時代に戻って確
かめてきます」

一迅の風が吹いた…

娘はどつやら元の時代に帰ったようだな…

ブシュッ!!

胸が焼けるように痛んだ…

3本のひっかき傷がわたしの胸元にくつきりと付いたのだった…

「くっ…でたか？透明熊が…霊力の反動、霊力の対価…マタギに撃ち取られし山の主等の怒り…それが形になるは我が傷跡のみか…」

私は膝から倒れ込み、
気を失った

壹拾壹

死んでいるだろうと…私は些か自負していたのだが、どうやら、天狗に会うでもなく、私は目が覚めた

血が辺りに広がってはいたが…傷は塞がり、熱も下がっていた…

「あー…その…なんだ天狗様か？助けてくれえ…足を…足をもがれたんじゃ…」

なにやらその筋の者らしき奴が片足を失い、這いずりながらこちらに向かってきた

頭はおろか、眉毛すらないその男は巨躯な体をえっせほっせと引き

ずっていた

私はムクツと起き上がり、男の側に寄った

「何てことだ…刃物で足を切られとるではないか？どうしあった？」

男は急に真っ青になり、叫び始めた

「あーっ！！足がない！！足がない！！あーっ！！」

どうしたものか…この男を昔から知るものならば、生やしよつてもあるのだが…

「ヨイツと…」

私はとりあえず、男の足を止血した…
霊媒師ならこのくらい容易いものだ…

男は冷や汗をかき、取り乱していたが、我に返り始めた

「はあはあ…ありがてえ…落とし前に奴さん方、足を持って行きやがったんだ…俺はもう用なしだよ…」

その筋の者とは思ったが…だいたいが僧侶の名折れ…恨まれても困る故、治しはしたが

奴さん方とは…少々引っかかる

壹拾貳

「あんだすげえな…死ぬかと思ったが、みるみるうちに傷が塞がっちまった…」

木陰で私は男と話していた…

私を霊媒師と信じる者は数少ないが、こういった場合、否が心にでも受け入れてしまうものだ…

「いやっ俺はあんだを信じないねっ！悪いとは思っが、最善策だと気付いてくれ…奴さん方と来たら…鬼を飼ってやがるからな…聡明なる、人と妖怪を繋ぐ鬼…闘牙とっぎ…あいつが介錯をよくやるんだ…」

心を読まれた気がしたが、最善策と言われては受け入れずには居れないものだ…

互いに余りに早く気心が知れてしまったのだろっ…

「鬪牙：名は聞いたことはある。奴は戦場で生きるはずなんだが…
落ち着いてしまったのか？」

男は思いつきり木を叩いた

「違えねえっ！！あいつは戦場で血を吸って生きるべきだった…あ
あ…つまり人を斬って斬って斬りまくるべきだったってわけだが…

とにかくだ…鬪牙の時代は…終わっちまったな…碌をもらったんだ…鬼の分際でな…」

碌を…

男の話に聞き入りそうだったが、いかんいかん…

私はそこはかとなく、男を気遣うことにした

「それは残念な話だ…欲の皮の厚いどこぞの主人が召しとったのだろっな？」

男はコクコクと頷いた

「違えねえ。違えねえ。鬪牙はあんたみたいな魔力を身につけちま
つて…おっかなくて仕方ないんだ…」

魔力…か

次から次に私の興味は惹かれるばかりだ

吉拾参

「分かると思いますが…鬪牙の奴はまだこの辺にいますんで…奴は俺を達磨にする気だったんですぜ？介錯するやつが…はっ、イカレてやがる」

そう言われてみれば…いくら何でもこんな山奥まで、片足斬られた状態で登ってこれるはずがない…と言うことは、処刑場はこの山と言っわけか…

「そうか…それではこの隠れ蓑を渡そう…ほとぼりが冷めるまで隠れているが良い」

私は枯れ葉を風に乗せるように集め、蓑を作った…

この蓑を纏えば、外観からは姿は見えない…

見えるとすれば、霊視のできる者くらいか？

うーむ…鬪牙に通じるだろうか？

「悪いが私も鬼とやり合う気はないんでね…何とか凌いでくれ」

男は少し不満そうだったが、隠れ蓑を受け取った…

「こつ言っちゃ何だが、鬪牙の奴を欺けるだろうか？…いや、旦那の気持ちもわからなくもないんですがね…有り難いこつた…はあ…」

後ろ髪を引かれる思いだったが…せめて天狗になるまでは、鬼とは対峙したくない…

「そつ言つな…ではな？」

私は颯爽と山を駆けていった

天狗…天狗に会い、透明熊の手を交わす…それからまだあの男が生きていたら…助けてやるか…

「待てっ！お前天狗か？」

死に神を貰っちゃったか？

八頭身の鎖帷子を着た

般若の面を整頓したような面立ちの鬼…

骨肉隆々の体、腕を交差して短刀を両腕に持っていた…

天狗ではない…

まだ天狗ではないのだが…

「そ、そうだとしたらなんだと言っただ？」

鬼は右の刀を私に向けた

「片足のない男を見なかったか？天狗ならば山を把握しているだろ
う」

なるほど…まだ隠れ蓑を渡しきったわけではないようだな…

どうするか？

ふと、私は上の空になった

壹拾肆

脳内革命つてのが若干なりとも起きているのは確かだ…

天狗を探していた最中に、鬼を見つけ（見つけられた形だが）励みにはなつたのだが…まあ、鬼が居るなら天狗もこの辺に…と私らしくもない安易な発想で終わらせたのは、目の前の鬼が余りに…鬼離れしているからだ…

何をしでかすやら…

人の業を食い散らかすやうな、鬼畜ではあるまいし…

「それならば、まだ勝機はある…」

うっかり口に出してしまった私の本音を鬪牙は聞き逃さなかった…

「正気？おまえ片足のない男を見たのか？まだ正気を保っていたのか？」

まあ…頭のキレそうな鬼とは言え、こんなものだろうな…

臨機応変に頭の柔さを調節するでもない
ひたすらに堅物だ…

「まあ…そう言うことだ…場所は分かるが、私が感づくなり、奴も気づいて逃げてしまっただろうな…黽ごっこは目に見えている…あれでなかなか頭のキレル奴だったからな…」

鬼は刀を鞘に収め、暫し考えていた…

すると、残像を露わにし、私が何処かと辺りを見渡し、正面をむき直したそこに鬪牙が、より接近して立っていた

「おまえ…天狗じゃないな？何でも良いが、把握しているなら協力してもらおう」

冷や汗が滝のように流れた…

考え直せっ

あんな男…見殺しにしても差し支えなかつた…

「ああ…思い出したぞっ！その片足のない男なら、その木陰にいる…隠れ蓑を覆つてな…」

鬪牙はニヤリと笑つた

「教えてはダメだろ？あの男は感づいて逃げてしまつたんじゃないか？どうするんだ？」

し、しまつた…
泥沼に足を掴まれたような…

私はこんなときにまた上の空になってしまっていた

鬼がなんだ…話が見えていないのではないかつ
などと脳内革命は収まりがつかなくなっていた

壹拾伍

天狗ではないにしろ、私は屈強な霊媒師。後々やれ鬼を討ち取った霊媒師だの、無益な介錯を廃止させた霊媒師だの、やんややんや謂われるのは適わんからな…

しかし、選択肢として最善なのはやはり、この鬼を倒す。と言うことになるだろう…

だってそうじゃないか？
あの男を売ったとて、恨みを買うは、なんだか情けないはで…たま
ったもんじゃない

かと言って

鬼に協力するフリをして、探し回ってみるのも時間の無駄だ

何より私は天狗に会いたいのだ

「どうやら…私を天狗だと思っていないようだが…それは残念な話だ」

鬪牙は一瞬後退りした

これこそまさに勝機と確信し、私は幻惑を見せた

鬪牙の主人が鬼達を八つ裂きにする幻惑だ

「う、ううっ…やめろっ！！上様は妖怪を愛でて下さる方。貴い方。う、ううっ…」

底冷えのする鬪牙の殺意が反転し、魑魅魍魎を下回る物悲しさを発した

「おいっ！おれはここだっ！！さっさとやっつけてくれえ」

山の隅から隅まで鬪牙の哀愁に満ちていたが故か？半ば遊び慣れたあの男には耐えられなかったのだろう…

「黙れっ！！私はお前になど興味はない…首を…首をよこせっ！！」

…なるほど、鬪牙とはどつやら真面目な鬼のやつだな

壹拾陸

「お前に欲情などしない。達磨にしたとて同じだっ!!」

鬪牙の牽制にも関わらず、男は片足でケンケンしながらこちらに近づいてきた

「旦那…: すいません。せつかくの蓑が台無しになっちまって…: 一つ言うのって第三者にまでバレると効果なくなるんでしたよね?」

まあ…: 効果はなくならないが、疑心暗鬼に捕らわれやすくはなるだろう…: いずれにせよ、この男の問題だ

「あんたが天狗なのは分かったよ。聞いてくれ…: こいつをさっさと

処刑したいんだ…だのにこいつと来たら、俺を女と思っても介錯できるのか？とか聞いてきやがってっ！頭が可笑しくなりそうなんだ…」

なるほど、その結果が達磨と言っわけか…

なんともおぞましい現実だ…

しかし、流石と言えないわけではない…
生きとし生けるものへの誠心誠意のこもった慈愛とも言える…

「ち、違うんだ…こいつは鬼畜生だから、絶対俺に抵抗の余地があ

るから、敷かないだけなんだよ。わかるだろ？なっ？なっ？別にマジで達磨にしてほしい訳じゃないんだ。魅力の話だろ？この鬼畜生みたいな魅力が俺にもあるんですぜ」

命乞いもここまでくれば、立派な道理か？

が 図らずも仲介役となった私に何か善い裁きの巧妙があればいいのだ

吉拾漆

しかし、なぜ処刑場をこんな山奥に移したんだろうか？

「おいつ、鬼よ？なぜこんな山奥を選んだのだ？」

鬼は苛立ちを隠せない様子だ

「私がつまらぬ情をこいつに抱いてしまったからいけなかったんだ。死ぬ前に見ておきたい景色があるなどとぬかすから、連れてきてやつたのに…女と思えだの何だの…気色の悪い奴でっ」

鬪牙は不甲斐なさを露わにし、膝から崩れ落ちた

先程の私の幻術も相まっていたのだろうか…

鬪牙の身はいかほどか小さく見えた

「油断したか…人の情とは鬼には些か甘美すぎたようだな…主人への面子もあるだろう…さて、おまえに残された道は2つある。この男の首を取るか、この男と供に逃げるかだ」

仲介役と言いながらも、半ば他人行儀で、配慮に欠ける冷たさはあったにせよ。命のやりとりに深入りは禁物だ…と私は思ったのだ

化けて出られかねんからな…

「ちよ、ちよっと待ってくれよっ？旦那っ。そう言われると俺の気も変わるってもんよ…俺としては、鬪牙とも旦那ともおさらばしたいんだよなあ…」

ここで彼の男がごね始めた…まあ、この事態で冷静なのは評価に値するが、確かにな…私も鬪牙も霊力ないし魔力を携えているだけに、男もやけっぱちなのだろう…な

「私は構わんぞ？後は鬼とお前次第だ」

鬪牙はスクツと立ち上がり、男に短刀を向けた

「そう言うことだ。この天狗とはこれっきりにして、お前を処刑する…」

今まで鬪牙が醸し出していた冷たい空気は、辺りにまだ残っており、まるで彼の男の最期を暗示するかのようだった

壹拾捌

「そりゃねえよっ！元の木阿弥じゃねえかつ！確かによ？最期に見たい景色はこの山奥にはないかな？あるにはあるんだよ…なっ？」

男は血相を変えて、私にその旨を訴え始めた

死の覚悟と言うのは、第三者には見せたくないものなのか？
単に生きながらえたいだけなのか？

この男には人の情を揺り動かす何かがあるのだろうか？

私も鬼のように孤独に苛まれていたかのようにだ…

「男よ…名は何と言いつ…」

男は少し残念がってはいたが、渋々ながら私の問いかけに応えた

「テングと申します…いつからかの記憶がないんですが、どうしても生き延びなければと言う謎の使命感に駆られております」

テング……

彼の男の心持ちからは「テング」と言う響きばかりしか感じられず、私の探す天狗とは別のものな気がした

「それは災難だな…しかし、テングとはまた因果な名だな？私は今この山の主である天狗を探しているのだが…心当てはないか？」

と、私のテングに対する問いかけを横取りするかのようになり、鬪牙が話に割って入ってきた

「待て待て、貴様は天狗ではないのか？」

テングに向けていた短刀を私に向けた鬪牙は、些か矛先が鈍っていたようだったが、それよりもこれは、厄介なことになった…

壹拾玖

「そつだ…天狗ではないが、お前も味わつただろ？私の幻術を…」

鬪牙は刀を収め、少し萎縮したようだ

「それはそつだな…仕方ない。腑に落ちないが、このテングとか言う紛らわしい奴を葬ることに専念しよう…」

テングはそれを聞くなり、キツと鬪牙を睨みつけた

「あんたはもうダメですよ。法を犯している。あの主人の設けた御法度に寄らずとも、罪人を外に連れだした時点であんたの碌は潰れちまってるんだよ…ハハッ…口から出任せのつもりが、嘘から出た

誠になつちまつたか：ハハッハハハッ」

テングは訳も分からぬ様子で泣きながら崩れ落ちた…

そう言えば、片足はなかったな…

「き、貴様あつ！！そこまで企てていたかつ？！腐れ外道がつ！！」

闘牙が口からどす黒い気体を髑髏のように吐き出した

やがて、テングの寸で迄漂ってきた髑髏の気体は、テングの失われ
た方の足の太股に焼き付いた

「う、うぎゃあっ！！な、何てことしやがる？！あ、足が腐っちま
う」

闘牙はニヤリと笑い、刀を抜いた

「さて…テングよ？これからお前のその残された足は察しの通り腐
っていくが、一つだけ助かる術がある。それはこの私が、お前のそ
の足を腰元から切り落とすことだ！！」

テングはヒィヒィ言いながら、私に歩み寄ってきた

「だ、旦那…助けてくれえ…お、俺が死んだら、この鬼畜生が付きまとい始めやすぜ？除呪して下せえ…」

テングの太股が、蚯蚓のように血管が浮き出て腫れ上がり、青黒くなり始めた…蠢く血流は呪いのそれをいたましく、私に印象づけた

「おいつ、そんなことはないから黙って見ていてくれないか？去ってくれても良い。この男さえ死ねば、私は自由の身だろ？ハハツ…何て奴だ。上様に合わせる顔などない…苦しんで死ねっ！！」

忠義心の高さ故だろうが、私には単なるエゴにさえ見える…それほど禍々しく、妖気に苛まれた空間となっていたからだ

「あゝあっ…あゝああっ…い、痛いつ！！助けてく…れえっ」

呪いはテングの身体を這うように巻き付け、やがて、男は絶命した…

テングと言う謂われは、お調子者故のあだ名か何かだろうか？
因縁めいたものを感じずには居れなかったのだが…

貳拾零

静まり返った山の空気は濁っていて、体に入る度に胸焼けがしていた…

私としたことが、呪いのとばっちりを喰らってしまったのか？

「お、おえーっ…」

私は悪気を体から追い出すように、吐き出した…

そう言えば、昼間から何も食べていない…

よって、何も出ない…
空嘔吐だ…

「ハツハツハツこの程度でヘコタレるとはな…人が死ぬのは耐え難いのか？そう言った意味で天狗ではないと言っのなら、こちらの考え違いだが…」

意識とは別の何か…人の生き死には、私ほどともなれば動じるに値しないが、この死は何か違う…

それは、むしろ熟達した感性故の憤り…と言っか。胸糞の悪さと言っか…

こんな鬼畜生にやられてはまずい奴だったのではないか？
鬪牙めの主人の器では収まりきれなかったのではないか？
呪いの類を使うには早すぎたのではないか？

もしくは…

「因果ではないか？こいつの名もまたテング…当たり障りない呼び名と通っていたようだが…もしや…力を失った天狗ではないか？なあ？」

どうやら、鬪牙の奴はちゃんとした儀を踏まずに処刑を行ったせい
か。気が高ぶっているやうだ…

私も…若干なりの焦りから、このテングは透明熊の手で成り代わっ

た天狗自身ではないか？と考えずには居れなかったが…

鬪牙の傲りにも似たやつかみが、別の考え…つまり、これは単なる罪人だという確信を促していた

貳拾壹

「安易に物事を決め込まない方が良い…もし、このテングが本物の天狗の魂を宿していたにしても…時既に遅し…と言っわけだよ？」

高価な御品物を無碍にしたやうな…それを叱りつける親のやうに私は鬪牙を諫めた

鬪牙はぶるぶる震えだし、高笑いを始めた

「あつ…ハハハハツ！！そうかつ！！それで貴様は残念そうな顔をしたのだな？それは悪いことをしたな？どうだ？これから主人の元へ帰るが、お前も来るか？何…天狗の所存の有無なら主人の元に居ればいくらでも調べやうがあるだろ？」

主人か…そう言われてみれば、こやつ的主人とは如何なる者なのか？
気になってはいたんだが…

私としては、それ以上の智に用はないのだ

「いや…お前の主人には厄介になるまい…因みにお前の主人はどんな奴なんだ？」

鬪牙は私のそれを聞くなり、水を得た魚のやうにまたもや、高笑いをかました

「天狗だよっ！！本物の天狗さっ！！きつとこのやりとりもお見通しさっ！！ハハハハッ！！間抜けな奴め。気が向いたらで良い…気が向いたら、屋敷にでも顔を出すが良いさっ」

スツとテングの首を切り取り、鬪牙はそれをヒョイと持ち上げ、忍者のように木々を足掛けに、駆け抜けていった

赤っ恥か…

さても今の私の顔色は天狗のそれほど赤々と紅潮していたのだろうか

貳拾貳

テングの胴体を置きっぱなしにした鬪牙の奴は、この殺伐とした山中にせめてもの余韻を、とでも思ったのだろうか？

片足と首のない軀、もしや天狗の魂が宿っていたのではないかと思うほどだったが…薫にも継るとはまさにこのことだったのだろうか…

「腑に落ちん…しても腑に落ちんな…あの鬼畜生に何か一杯食わせねば…このテングという男…素性は知れぬが、何奴だったのか…死者を辱めるのは私としても気に病むが…」

私はテングの軀に寄り、そっと触れた…

「しまったっ!!」

私は万物に通じる霊媒師、ましてこのテングの生への執着心を侮っていたことがまた、拍車をかけた…

首と足が生えてきおった…

恰も、素性が知りたくば俺に聞けと言わんばかりにだ…

目を覚ますのだろう…

しかし、首まで生えては…鬪牙の奴が持ち帰った首は何となるやら…妙に小気味がよくなった

貳拾参

不可抗力のなせる業であったか？

テングの体は元通りとなったはずなのだが、ピクリともしない…

「所詮は抜け殻か… 霊魂はすでに黄泉の国へ旅立ったやうだ」

私は意味深に空を見上げた

人の死というのは、どこか儂く、今はそれより齒がゆさの方が勝っていた…

テングは黄泉の国で天狗に会ったやもしれん…

私は天狗になりたいと言うに…

透明熊の手…この妙技を知らぬが仏か？

「天狗めっ！！私を恐れておるか?!」

私は有らんばかりの声を振り絞り、高らかに叫んだ

「…んっ？んんっ…旦那？何言ってるんだ…俺は別に旦那を恐れては
いないよ?」

テングの奴が甦ったか…
なにやら酷い勘ぐりを起き抜けにやっているやうだが…

説明…のしようはあるのだが、それに際しての靈力の鈍り、位を狂
わせることにもなりかねぬし

そのままテングの思惑を転がしてみやうか？

はてさて

なんとも因果なものとなったな…

式拾肆

「旦那っ、足まで治ってるじゃないですか？いやぁ…旦那には世話になりっぱなしだなぁ…そうだった！旦那に耳寄りなネタがあるんですけど…」

瓢箪から駒とでも言うか…寝耳に水やもしれんな…

私に耳寄りなネタと言えば、天狗についてくらいなものか？

はて？こっちのテングには話したことあったらどうか？

「ほう…何でも良いが、つまらぬ事だったら承知せぬぞ？」

半ば冗談混じりで、私もテングの話に構えてみることにした

「へ、へえ…お気に召しますやら、少々疑わしくなってきたが
…鬪牙の奴の主人、本物の天狗…って俺の事じゃなくて、大妖怪の
天狗ですぜ？天狗なんですか？しかし、おかしい事を言うんですあ
…この俺が天狗だと…天狗の魂はこの俺だと言ってますあ…それで
上の空でみんな俺のことをテング、テングと呼ぶんですあ」

ふむ…これはどうやら、このテングと言う男は透明熊の手を使って
いるやうだな…

記憶が一部失われている…

時に…いや、ほとんどの場合、そう言った後遺症が現れるものだが…

困ったな…

つまり、天狗の肉体はあれど、それと入れ替わった日には、この男の魂を我が肉体に入れると言うことになるが…

「そうだったのか…もし、その話が誠ならば、私にも考えるところがある…どうやら、その肉体では遊びがすぎているか何か知らないが、天狗の魂が十分に生きていないやうだ…」

替わるべきか…替わらぬべきか…

このままでは天狗の恩恵が私には伝わらない

ここで私とこのテングが入れ替わり交渉すべきではないだろうか？

しかし、天狗の魂でこの程度のものなのだぞ？

この男の世慣れ果てた体に私の魂が入って如何なるものだろうか？

…どうしたものか？なぜか、話が疑わしくなってきた

貳拾伍

手っ取り早い話、その鬪牙の主人である天狗に会えば良いのだ。と言つ風に落ち着き、私は寸でのところで透明熊の手をテングに使うのを控えた…

仮にテングが天狗であっても、私は遊び人の肉体に入るわけだからな…

余りに無謀と言つものだ

斯くして、私達はそれぞれの思いを秘めて、山を降りることにした

「はあ…俺は首まで切られてたんですか…いやあしかし、巖吉の旦那は人間なのに凄まじいなあ…達人っつーか…はあ…」

テングの奴がホントに天狗だとするなら、私は本物の天狗に認められたことになるか…

「時間旅行をしたこともある。私がこの辺りを司るが故に言の葉がときに先走ったものになるのだ…もしかすると、処刑などもまだこの戦国時代では確立されてはいなかったかもしれない」

テングは呆気にとられすぎているやうで、私よりももっと遠くを見つめていた…

「へえ、時間旅行かあ…旦那はアヘンをやるんですか？実力者ともなれば、世離れするんですかねえ…」

アヘン…？

いや、時間旅行は時間旅行だが、気がおかしくなって意識がどこかへ行ってしまったとでも言いたいのか？

「マジギレだ… テングよ？ 私は時間旅行を実際に行っている…」

私が鋭い目つきで睨むと、テングは恐れおののき尻餅をついた

「…マジギレ…アヘンの効き目がですかい？ お気持ちはわかりやすが…俺はアヘンは…あれ？アヘン…アヘン…どうだったかな？袖もとにあっただかもしれないです…」

するとテングは、袖もとから三角に包まれた紙切れを取り出した

「持ってましたっ！！さっすが旦那だな…抜け目ねえや…良質なア
ヘンですぜ？」

「き、貴様あーっ！！」

私はテングの止まらない勘違いに腹を立て、手を振り上げた…その
とき

「ソウンよ…それは私のアヘンだ。やるでない…わかったな？や
るでない…」

山を揺るがすような深い声が私のそれを制止させた

「天狗か？」

尻餅をついていたテングは、沃さと立ち上がり、声に反応した

「ああ…そうだった俺はソウンだったか…天狗様っ！！あんたに会いたって旦那を今から連れていきます故、了承くだせえ」

「良かろう…あの鬪牙から逃げ切るとは…さすがの知恵者だ…バカ比べには及ばずともな…ハッハッハッハッ」

「ありがてーっ。ありがてえこっです。すぐ、今すぐにも旦那を
そちらに連れて行きます故」

ホロリと涙が一筋頬を伝った。私は何を勘ぐっていたのだろうか？

貳拾陸

天狗…まるで天狗が出生してから現在に至るまでを振り返りたくないやうな…

そんな気分だった…

仮にこのテング、ソノウンの奴が実質の天狗の魂を宿していたにせよ

完全なる客観性を問うならば、現在、天狗にあるソノウンの魂はすでに溶け合い、仏の域に在るではないか？

「フフッ…」

私は含み笑いを浮かべた

「どうしたんですかい？旦那。もうすぐ屋敷に着きやすが…旦那あ…あんたやっぱり…アヘンを？」

こいつはさっきから、アヘンアヘンと…

このソンウンもまた天狗の魂と溶け合い…立派な罪人となってしまったか？

遊び人にしては、勘ぐりが過ぎる…

残念なことだ

「アヘンなどは、浮き世にも及ばぬ世間知らずの帳尻合わせに過ぎん…その点私は心配あるまい」

ソウンはしばし、笑顔のまま抜け殻のやうに静止し、すぐさま俯いた

「さいですか…旦那は意外にハイカラなんですな…お節介焼きの俺を許してやってくださいえ…あっ着きやしたぜ？」

なんとも、調子の狂う奴だ…

眼前には巨大なお屋敷、囲ってある塀を見る限り、一万坪はあるだろうか？果てしなく広い敷地には、作り込まれた頑丈な門が立ちはだかった

不死鳥や仏などが、浮き彫りに縁取られた門…

ハイカラな私には物足りないはずの古風さであったのだが…

胸を鷲掴みにされたのは不思議なことだった

貳拾漆

「御主人。旦那を連れてきましたぜ？」

ソウンの奴が何とも嬉しそうに天狗を呼んでいた

まあ確かに、天狗の軀への親近感は、魂が惹かれるのだろう…他よりはあるが故の振る舞いとなるだろうか？
アヘンの所為ではあるまいて

ギィッと門がこちらに向かって開いた

そして、開け放たれたそこには鬪牙が腕組みし仁王立ちで立っていた

「ソウンさん…いや、天狗様か？あなたの言った通りだ…日時から条件まで寸分の狂いもなく、その巖吉とか言う霊媒師を連れてきた…あなたが道楽野郎のソウンと透明熊の手を交わすと言ったときは妖怪等も戦慄きっぱなしだった…あなたが…あなたの命の重み、妖怪等にもしかと伝わったよ…」

ソウンは鳩が豆鉄砲でも喰らったかのように、面喰らっていた

「ああ…そうだな。それよりも客人だよ？」

門を抜けると、銀色の石畳の道があり

その辺りには砂浜から集めてきたのだろうか？

木目の細かい砂が敷地内を埋め尽くしていた

肝心の屋敷…そこまでで、石畳の道は途絶え、階段が5段ほどあつ

た。圧倒されると言うよりは…ハイカラで、この時代の先端にいますよ？と語りかけてくるやうな

見事な寺構えであった

「どづいつことだ？私を担ぐなどと、天狗は今何となっているのか？」

鬨牙は少し考え込んだ…

「っ、つまりですね？一芝居だったって訳ですよ？天狗様の御心のままにです」

「天狗に会えば分かるわけだな……」

闘牙は静かに頷き、先を急ぐような表情を浮かべた

式拾捌

渡来品の仏像やら壺が、幾何学的に配置された通路…上を見上げる
と龍の鱗のやうな天井

龍の冒袋にいるやうで、よくよく考えてみると違う…

何とも気味の悪い心持ちは屋敷を深めるほどに増していった

「旦那あ…すげえ金目のものばっかだな？へへッ…すげえや…いつの間にか…」

金目…か

幾何学的だとかなんとかよりも、権威の衣であったのだろうか？

確かに、このソウンが天狗の魂を宿しているのならば、事実だろうが…

道楽野郎は金で権威を買いと示唆しているやうなものだな
そう言った離れ業だったのだろうか？

112

何とも萎える話だ

私はすっかり、天狗の軀を欲することはなくなっていた…

透明熊の手も普通は加減して使い、相手の人生を要所だけ掻い摘んで見るものだからな…

あの霊峰には、それだけの霊力を求めに言ったに過ぎんのに…

すっかり、時代錯誤となってしまうたか？

「ソウン？この時間口惜しいな？占ってやるつか？」

私は天狗に透明熊の手の使い方を教授してやらんと言わんばかりに、ソウンに語りかけた

「あんた馬鹿か？占いも天狗様の方がいくら何でも、あんたよりは上だろ？身の程を弁えてくれっ！！」

鬪牙の奴が呆れ果てた様子で私を振り向き諫めた…

まあな…よもや、大妖怪の天狗様に勝てる占いではないが…フフッ
まあ止そう

「そうですね旦那？きっと天狗様が旦那の人生を更なるものにして下さいやすからっ」

「そうだな…ソノウンも、そして鬪牙にも悪かったよ。先走ってしまった…」

鬪牙とソノウンは頷き、私達は天狗様めがけて一直線に突き進んだ

貳拾玖

「蔵吉と言う霊媒師は御前か？霊媒師にしては、恰幅が良すぎて疑わしいな…」

天狗様の居わす御堂までやってきた…

内部には壁一面にヤツデの葉が敷き詰められ、天狗様の座る眼前に月の輪熊の毛皮が頭ごと大の字に俯せの状態で敷かれていた…

肝心の天狗様は真っ赤な肌艶に長い鼻、目は鬼のやうに鋭く、しかしどこか虚ろであった…

「お、俺は…ソンウンですぜ？天狗様」

天狗様は一段高い御座から降りて、ソンウンに詰め寄り、マジマジ

と見た

「ふむ…それでは、彼の男が蔵吉か？…何とも天狗の真似事のやうな出で立ち…それにソソウ…お前と変わらぬほど恰幅が良いではないか？霊媒師ではなく喧嘩屋ではないか？フツツ滑稽なる者よ…」

なんたる…なんたる…さすがに、魂は道楽野郎だけあって相手をひけらかすような考えが染み着いているやうだな

この御堂の具合も、透明熊の手を錯覚させているかのやうだ

「約束が違うのではないか？期日を守ったのだから、透明熊の手を

交わし、早く元の鞘に戻ったらどうだ？」

直感と事実が入り交じった、私の中ではカマを掛けたつもりだったが…
これはまた厄介なものを引きずり出す結果となった

「透明熊の手が欲しいのか…天狗への忠誠心が漲る男だったとは…
これは失敬っ。良いぞ？壁にあるだろう？あれからこそが天狗印の透
明熊の手となる」

天狗様は私に、壁一面に敷き詰められたヤツデの葉をお勧めになっ
た…

ば、バカな…
私を一客人というか？
信じられん…私は本物の透明熊の手を見に来たのだ

「それは良いっ！さっさと元の鞘に戻りなされっ！！」

「だ、旦那っ？あんたやっぱリアヘンを喰らったか？透明熊の手は正真正銘あのヤツデの葉ですぜっ？何か見えないものを予想していたんですか？霊媒師っーのも胡散臭いっーか…呆れてものが言えねえや…どうなつても知りませんぜ？あんたはすでにこの時代の人間とはほど遠いものだと言っに…」

そう言うソソウンは天狗に向かって何やら話し始めた

そのすぐ後

パンツと手を打ち交わし、私の言う透明熊の手を行った

ソウンは倒れ、口から涎を大量に垂らし、鼻水は垂れ流しで、目は虚ろ…アヘン中毒を引き起こしていた

「どうだ？敵吉よ？私と交わしてみるか？」

天狗様が私を見た…
射抜かれたやうな…それはあまりにも効果的な刻であった

参拾零

間を空けてはならん。それこそ天狗様の思う壺だ…

「是非願いたい。かねがねよりそう決めていた。さあ早く!! 透明熊の手をつ!! 私と早くつ!!」

些か気味の悪いことになったが、天狗様は腰を御座に深め考え込んだ

天狗と言う者は常に悪条件と思われる方に倒れ込むかのやうで、ここにきて考え込むなど正気の沙汰とは到底思えなかつたのだが

「ダメだ…占つてやろう…お主の商運をな? 霊媒師なれば何かと金が要らう?」

なっ…まさかアヘンが魂にへばりついていたか？
それほどイカレた応答…

「私は千里眼で、お主の行いは知っているつもりだ。この時代を捨て、戦いの果ての果てを見てきたりもしたのだから？奇っ怪な老夫に欲情したりもあつたらう？私は我慢できず、処刑する予定であつたソウンなるド畜生に成り代わり、お主に近づいたのだが…どこか間違いはあるか？」

先入観だっ！そんなもの見通すばかりで主観でしかない。私は…私は…は…

「私は断じて、老夫に欲情などしてはいないっ！！！」

天狗様は幼げに困った表情を見せた

「そうではない…私ほどの男がソウンなるド畜生に成り代わり、お主に近づいたのだが間違いではないか？危険を通り越し、愚行でさえある。まだアヘンの澱みが頭にあるやうだ…」

言葉もない…主観的であったのは私の側だったか…労りや敬いの念を無くして、極限たる透明熊の手など交わしようか？

「ぐ、愚行でありますぞっ！！慎重になるべき点は的を得ているが、既に言つべき地はない！！」

天狗様は静かに頷いた

「解っておる…さても、殿吉よ？お主の閃きに賭けてみたい。頼まれぬか？」

天狗様とは元からこうであったのか？
私の閃きに依存しやうとは…私を呆れさせるは、もしやすでに案があるのだろうか？

参拾壹

「酒…酒を飲み交わしましょう？天狗様。それですべて奇麗に流れ去り、日が経てば地も固まりましょう」

閃いたと言えば閃いたが…こんなんでいいのかどうか？

天狗様の御機嫌は如何なものか？

「酒…酒と一言に言っても多様にあるだろう？御前の所為でアヘンは時代の決まりより早く出回ったのだから、要注意だ」

ううっ…時代のズレを請け負うのは私の使命だが、まさかそこまで見抜かれているとはな…

「そう言われてみれば、自己の知的欲求に駆られ、私も無茶な時間旅行をしましたが、酒はそうだ…この時代の酒屋で買ってきましょう」

天狗様はお気に召さないやうで、腕を組み俯き加減で胡座をかいて座ってしまった

「闘牙よ？御前、酒は飲めるか？」

闘牙は天狗様と同じやうに腕を組み、静かに頷いた

「天狗様…酒は飲めますが、私は要らぬ詮索などせずとも、さっさと透明熊の手を交わした方がすつきりしますがね…」

天狗様はヤツデの葉を一枚手に引き寄せ、鬪牙に風塵を放った

鬪牙は御堂の奥まで吹っ飛び、気を失った

「これでは堂々巡りに過ぎん…しもたな、酒を鬪牙に買いに行かせるつもりだったが…巖吉よ…それでは買ってきてはくれんか？」

すると天狗様は小判を三枚、柔らかな風に乗せ、私の手元に運んでくれた

「はいっ天狗様。早速行つて参ります故」

私は韋駄天のごとく、御堂から飛び出した

参拾貳

足も軽く、私は酒屋から酒（清酒）を一樽買い
怪力の口寄せをして、韋駄天の如く帰ってきた

未来に行き、洋酒、麦酒などに手を出そうと考えるほど、気分は高揚していたが、天狗様のお手前ともあれば、この時代の酒にするしかあるまいて…

御堂まで戻ってくると、天狗様は肴や漬け物、山菜を揚げたものなどを用意されていた

鬪牙も目が覚めていたやうで…

それより気になったのは、天狗様と鬪牙の橋みたいに折れ曲がった笑んだ目だった…

「蔵吉よ？私は知っておるぞ？お主…女に手を焼いておらんかったか？心の読めぬ女、月姫…それを占うために透明熊の手を探していたやうに見えたが…気が変わったか？」

そ、そうだ…

月姫…私が愛した女月姫…民を思うが故、欲がない

閃光のやうな月姫の想いが尽きぬ前に…なんとか叶えてやりたい…
そう思い透明熊の手を探しに山へと入ったのだが…あのセーラー服
の老人の亡骸を見て、事態は一変したのだ…

消えない意志は幸福の方を射してはいたが、其処に妨げがないとは、
まさか言えなかった

私は涙がホロホロと溢れ出たことに気づいた

達したのか？いや、達しすぎたか？よもや天狗様に見初められやう
とは、思いも寄らぬかった

「さいでございます…天狗様…私は恥ずかしながら…天下一の貴女、
月姫に心を奪われてしまったのです…」

天狗様は笑んだ目を崩すことなく、何度も頷いてくれた…
前祝いと勝手に先走る私は既に、この時代には相応しくないかのや
うだった

参拾参

「蔽吉…違うのじゃ…妾は天下第一の…び、美人ではないぞ？出直して来い…」

いやはや、仰る通りか…
この大和大国、鳶のやうに身心を解き放てば、この月姫様よりも美しい人が居やうが…私は既に葦となり、夢を…彼の女性を天下人と仰いだのだから…

此処は曹郡長、耶麻穰^{やまじょう}が住まう屋敷、無限殿…
国中からこの屋敷に歴史を伝える輩がわらわらと…

大和台地の天辺に陣取る無限殿は獅子の毛皮で覆われ、息づいていた…

武装された屋敷は造られた妖怪の邪気を放ちつつも、国中の猛者達の気合いの集う場であったのは言うまでもない

「私めの独断でございますぞ？天下第一の美人でございます…絶対に

っ！！ささっこの雪女の汗より精製された塩を…肌にお塗りくださいませ！！妖艶なりし、透き通る肌を…どうか…」

月姫様は目の色をお変えになられた…

まさかまさか世に存在しやうとはっと言うほどの面立ちであったが

…その刹那…私は月姫様の心を手に入れた

その一刻を帳消しにするかのやうに、月姫様は矛先を私にあてがった

「ダメじゃ！！妾を妖艶なる美人などと…世は冥界に落ちたか？味の良いものではない…去れっ！！透明熊の手を使いこなし、妾に良きに奨めよ？独断なるは大器な男じゃ…去れっ！！」

そう…私は雪女の塩を月姫様から仰せつかり、持ち合わせたか…言伝ならなかったやうだ…

「左様にあります…私は即刻に去ります故っ！！韋駄天の如く！！」

「そうじゃっ！！去れっ！！去るのじゃっ！！」

私は楽しかった…

何度も何度も月姫様と御話できることが…楽しかったのだ

そして、私はその脚である山へ駆け込んだのだった

参拾肆

酒も進み、私の恋話に彼の天狗様が聞き入ってくれた

しかしどうだ？素面で話せやうか？天狗様…鬪牙の奴まで…

「良いか、巖吉よ？恋とはあまり良い言い方ではない。まして雪女の塩など、どこから採れた塩か知るまいて…お主には心配りが足りんやうだ」

私は、ハツとした…まさか…塩ならぬ潮だったと言うのか？
私は酔った勢いもあり、その潮の線に鯨を見立てた

「それは、下心のやうではありませんか？ 私は使命…いや、天下一の運命を仰せつかったままであります故…あぁっ有り得ない…超マズい事になっ たっす…」

私はもはや、この時代に身を留めきれではない…幕末を越え…世界大戦を越え…高度経済成長を越え…深き和を…即席に求めすぎた…

若者言葉…と言うものだ…当然この場では気が触れておかしくなっ た…とは思われまい

「な、あんた。折角天狗様が作ってくれたツマミを…不味いつてか？ 臍物か？ 腸がいかれたか？ 廁に行けっ」

鬪牙の奴が身を乗り出してきた
しまったな…天狗様にさながら甘えてみたつもりだったが、鬪牙が
立ちほだかるか…

「止せっ…鬪牙よ？味の話ではない…此の奴はすでに、行くところ
まで行ってしまったのだ。巖吉よ…許されることではないぞ？無礼
講だ…」

無礼講…戦いの無意味さを知っていたつもりだったが、天狗様には
適うまい…私は此の時代に生まれ、此の時代で育つたのだ…

未来を幾らか知り、深き和に辿り着いたが、至高の和とは、偽り無
き時の間隔を慈しむことか…

「しかし…天狗様…私を病が蝕んでおります…」

心を開くことができた…
いつまで月姫様に尽くせるやら…私は黒死病を患っていたのだった

「巖吉よ…わかっている…わかっている…」

天狗様は此の期を見定めてあつたのかもしれない…
時間旅行をした異質な軀はそうだ…山のどこか静かな場所に葬って
ほしい

参拾伍

「こ、黒死病っ？ 感染症じゃないか？ お、おい… あんた他に隠し事あるんじゃないか？ なあ、天狗様よ？ こいつはちよつと酷いんじゃないか？」

私は酒の力も借りて、自分を蝕む病の話を尚やったのだが、鬪牙は一変して私を遠ざけ始めた

天狗様は鬪牙が必死に駆け寄るのを、片手の平を突きだし、制止させた

そしてグイツと徳利の酒（清酒）を飲み干し、私をキツと睨みつけた

「バカ言えっ！！ 貴様が死んだら焼き払うまでだ！！ 疫病で山を殺す気かっ！！！」

天狗様の気合いで鬪牙が吹き飛んだが…私は耐えた…

ビリビリと空気の痺れが体中を締め付けた…なんと言つ霊力

私はアヘンにでもやられたかのように意識が混濁した…

「ち…違います…天狗様…ペスト感染者を火葬しては、空気感染し
かねない…山の霊力に縋るしかないんです…はあ…はあ…」

痺れは解け、意識も回復した

「ふむふむ…己が尻は己が拭くか？笑わせよ…天下の霊峰、靈叡山は疫病に勝ると申すか？ハッ…面白い…ならばお主の死に時は、彼の霊峰に葬ってやる…私が直々にな…ハッハッハッ…」

宴も酣…私は天狗様からオスミを付けられ、御堂から去った

去り際、天狗様が私に一言、透明熊の手の使用方法を教えてください

「無理はいかん。理に適ないしとき透明熊の手は本来の力を発揮するであろう…」

参拾陸

どんな想いを込められた偶像物にも、それがたとい木や石でできていたにせよ。さらに硬い鉄でできた鑿を使い彫り上げられる…

木の硬さを知るとき、小枝をポキリッと折るのではない

石の硬さを知るとき、鑿を当てがいトントンと打ち付け、割るのではない

大木に拳をぶつけるやうな

巨石にヒョイツと座り込むやうな

自然の驚異を目の当たりにし、虚空に達すること

そうやって霊力は練られ、腕力に勝る…

が故に、私は情けを覚える…

腕力は弱いのか？
いや、腕力は強い…しかし、無知だ
霊力で腕力を修められる…

霊力は腕力より強い

時に断りが仇となり、身に降り注がんとする…

天狗様は巨軀で傲慢な私の体格に対し、明らかな不信感を示した：

腕力がまだまだ、人智を凌駕するほど在る…

「見てみる？樹齢百年は越える此の大木は私の拳でへし折れたのだ…」

刺々しい折れ目が私を睨みつけ、空から青々した葉が降り注ぐとも

木は硬いと云ってみやう

そうだ…

腕力が強ければ良い…十分な虚空なら得られる

しかしどうだ？

気づいてみれば、鳥の囀りさえ無くなっていた

腕に黒紫の斑点が無数に浮かび上がっている
病魔は進行を止むことはなかった

参拾漆

時間旅行の代償は、この時代のもっとも辛酸な病へと変換された

それは半ばこじつけのやうに、凄まじい速度で私の全身は黒紫色に染まってしまった

斑なくだ…

水面に浮かぶ我が姿…

化け物か…

私は今、大和湖の畔に来ている

大和国一の湖には、精霊使いが住まうとか

名を妖子まじと言う

「もし妖子が私の病を拭い去ってくれるのなら、私は何もいらぬ
…ううっ…うぐうっ…」

私は、醜く腐り果てた我が身を、嘆き悲しみ泣いた…

なぜ死なない…

これほどまでに変色した肌を持ってなぜ…

黒死病は発病したのではないのか？

「何を嘆いております？私は妖子…大和湖に住む精霊使いです」

湖の中心が赤い光を帯び、そこから現れたのは竜であった…真つ赤な火吹き竜…

私の頭に語りかけるやうな優しい声とは裏腹に、その眼光は鋭く、その巨体は湖に果たして収まっているのであろうか？と言っほど大きく、水上に出でた顔は私を向いていた

口からは炎が漏れ出ており、いつ吹き出すやら、私は肝を冷やした

参拾捌

「黒死病を煩っておりますが…一向に死ぬ気配がないのです…」

妖子は目を細め、私を射抜いた

「お前時を犯したなっ！！罪人なれど、死罪では間に合わぬ…お前が見てきた時代までその病はお前を生かすだろう…」

身震いがした…体は硬直し、なけなしの防寒手段はこれほど虚しいものか？

ガクガクに震える軀はやがて、救いを乞うやうに月姫のことを思い

始めた

そつだ…このやうな怖き場所に留まる意図もない…月姫に透明熊の手をみてもらおう…フッフ…

「よもや…忘れたのではあるまいな？天狗と話をしたのであるう？そのやうな心持ちで透明熊の手など使おうものなら、お前の身に入つた女を此処に呼ぼうぞ？」

相も変わらず、口からは炎が溢れ出でてあつたが…しかし、目が覚めた

「よ、妖子様っ目が覚めむる想いです！有り難き幸せ…」

私は瞬く間に平伏した

何故ならば

他に手があるからだ…そう妖子様は仰つてあるのだ…

私の心は曇天を突き抜け、真つ逆様に落ちた。

そして

すっかり「妖子様」と慕うやうになっていた
こんな幸せはないだろう

参拾玖

「理に適いしとき、透明熊の手は誠の力を発揮せんとする…透明熊の手とはその名の通り、目には見えぬもの。普段人はそれを素人仕込みにとは言え、無碍に使っておる…お前は霊媒師だったな？」

私はコクリコクリと頷いた

何せそうであるし、そうあって欲しいから、それ以上何も出てきはしなかった

「透明熊の手…女の口寄せ師が使うやうな、霊媒術の礎となり得るものが、お前のやうな霊媒師に必要かどうか判りかねるが…まあ…善かろう…伝授してしんぜやう」

伝授…透明熊の手とは伝授できるものなのか？

風がそよぎ、私に語りかけてきた

『それを信じては駄目だよ？透明熊の手は自分で探すんだ』

私は意識を風に持って行かれた気がした

妖子様の方を見ると、少しニツコリ微笑んでいた

妖子様は精霊使い

私に多様な可能性を指し示して下さい下さったのだろっな…

肆拾零

心なければ、何事も味気なし…と言っべきか…

妖子様はひたすらに、女というものを私に説いた

妖子様は尼や巫女の靈魂を吸って形を成した蟹だという…

私はまさかこんな神秘的な竜が、元は蟹であるなどと…真剣さを欠いてはいたが…これではマズい…

と、手に杭でも打つやうな心構えを持った

そんな私に妖子様は、殿方との叙情的交わりの話や言の葉の渡し合
い…

清いのは躰ばかりと、嘆くこともあれば
実は躰から汚れていくものだと言い張ることもあり

いやはや、尊くも清らかな靈魂の集合体

私は聞き入るばかりであった

「良いか？ 厳吉よ。透明熊の手を使うのなら、一つだけ彼の相手に
望むものを願え…物足りなさや味気なさを感じるやうならば、使う
てはならぬぞ？ 努々忘れるでないぞ？」

私は月姫様の何を欲していたのか？

心だろうか？

年甲斐もなく躰なのだろうか？

もっと明確に言うなれば、いや、言わねばならぬか…

心に決めねばっ！

我、愛故に求むる虫なりやっ！と刻んだ

「妖子様、有り難き幸せにありました。素晴らしき想いで、はちきれんばかりです」

妖子様はニコリと笑い
赤い光を纏った

光止みし頃

一匹の沢蟹が豆粒ほどの大きさで宙にあった

「すべて誠か…果ても心強きことよ…あのような小物が竜になろうとはな…」

私はすっかり気が良くなっていた

そこへ一陣の風がそっと吹いた

『月姫様に会う前に、黒死病を治さなければ、大変な無礼にあるぞ？』

また…風の精霊だろうか？私は妖子様にも否が応にも感謝しっぱなし
であった

肆拾壹

風の精霊は更に、黒死病で死なない私に対し、助言をしてくれた

『黒死病を治すには、黒死病で苦しむ人を一人も漏らすことなく助けるしかないよ…とある村が黒死病で滅びかけているんだ…ある名のある将軍が焼き討ちにしようと思論んでいるから、急いで!!』

風の精霊は私を酷く急かした

「ちよっ…名のある将軍が焼き討ちしてしまったら、どうなるって言うんだ？」

実体のない風の精霊を木や草や石に見立て、私は必死で教えを乞うた

『黒死病が灰となり、国に蔓延しそのまま、黒死病は手に負えない
広がりを見せることになるね』

明後日の方に話が飛んじまったようだった
なんてこった…村一つくらいなら、私の霊力で浄化しようものなの
だが

「その村はどこにあるんだ!!一刻を争うじゃねえか?！」

頭に血が上り、黒紫の肌は赤混じりとなった

『さあ…僕は風の精霊だから…妖子様に宜しくと伝えておいて…そ
れじゃ…』

そ、そんな…風の精霊さんよ…連れないうこと言わずに…

「お、おーいつー!!か…いや、わかる…もう風の精霊は此処にはいない…が、どうする…のっぴきならない板挟みの此の時に、全く閃かないとは情けねえ…」

はて…ホントに黒死病は焼き討ちにされたら、国中に蔓延するんだろっかなあ？

そうなれば、私が行き果てた未来は疎か、次の時代さえも…

「ええいつ我慢ならねえ！座禅だっ！座禅だっ！」

私は禅をとり、瞑想に耽ることにした

肆拾貳

私の千里眼は駆け巡り、山々を越え、谷を飛び、川を渡り、幾重も
の阻むそれらを思うままに免じた

しかし…見つからない

黒死病に蝕まれし村など全く持って見当たらない…

所詮は風の噂か…

「それでは、私のこの呪われた肌色はどうなるか…必ず何処に黒死
病に蝕まれし村は存在す。風の悪戯の方が酷いのだ…」

高揚感からか、心なしにか息が上がる…

恰も本当に国中を駆け巡っているやうだ

見つからない…見つからないと幾度も繰り返す内に、国の主かのやうな安堵感に包まれた

美しいものだ…怒りや悲しみに打ちひしがれた者達が次の日には、空を見上げ笑んである

ふと、国の主などと案じた己に嫌気がさし、笑んだ者達を責ぶ…

直進する力がふっと消え去り、宙に舞うやうな…

「私に限った病のやうだな…覚悟するしかないやうだ…幾百年このままである…」

私は瞑想から覚め、光を求めた

肆拾参

溜め息でも出やうかと言うほどに、私は今、心の隙間に風など吹かぬものかと物思いに耽っていた

颯爽と国中を駆け巡った反動のやうな倦怠感は凄まじく、言の葉をどこかにしてやられたかのやうだった

「うっ……うっうっ」

頭の中に知りもしない良識を詰め込まれ、無意識に申し訳なさを急かされているやうな閉塞感

そうである…良識だと判っているなら、体裁などわざわざ拵える必要などないのだ

もし滅びゆく村があるならば、如何様にも見いだせやう

本当にあるならばの話だが…

疑心暗鬼とでも呼ぶべきか？一刻を争うこのときに、滅びゆく村が存在しないなどと…

焼き討ちにあつたら、私は治りやうがなくなるのだぞっ？

国が病むのだぞっ？

「あっあーっ！あーっ！」

鴉のやうに私は情けのない雄叫びをあげた

急げっ急げっ早ければ早い方がその何処ぞの將軍の行く手を阻めやうぞ？

「ハツと閃いたぞっ！！將軍だ…この国の將軍を片っ端から当たれば、村を焼き討ちしそうな將軍などそうは居るまい…」

私の気は戻り、早速また千里眼を駆使することにした

肆拾肆

剩え、千里眼とは言え、天に許された力とは言え、將軍家の資料を盗み見る形となったことを私は後悔していた…

人を殺めるときつまり、人を貶めるときつまり、人を亡き者とするときというのは、終わったことなのだ…

鬪牙の奴を思い出す

奴はそれを知らぬかのやうだ

仮に絶対的な正しさがこの世にあるなら、そこを將軍家と呼ぶだろう

人が罪の集う場所…無限殿のやうな活気はなく、如何なる財も殺伐に消えて見える、虚無の屋敷…

しかし…しかしだ…

私が言いたいのはそのやうな美談ではない

焼き討ちなど…村を焼き討ちになどされては、私の病が治らないからなのだ…

良い話ではないか？私の霊力により治癒を促せば必ず村は救われ、焼き討ちなどと野暮な真似をすることもない

そうではなかるうか？

「ああっ…あつたぞ!!」

私の千里眼は遂に、お目当ての將軍家を捉えた…

そこから予測される村は…うむ、いくつか村はあるが、どつちやら將軍家が目を付けている村があるな

鉢句村…
はちくむら

のどかな自然に囲まれた、大凡呪われる要素の皆無な村だと言つに
…何故？

「こ、これは…ヨシコではないか？ヨシコだ…バカな…またセーラ
ー服を着ている…しかもまた寝たきりじゃないか？村人に食わせて
貰つてるのか？これは…」

村の畦道にあの超能力者の娘ヨシコが横たわっていた…

村人はそれを崇めるように彩り、毎日お祈りをしているやうだが…

着地点を誤ったか…

ヨシコの生み出した時間の歪みが原因で、黒死病が蔓延したのだろ
うか…

いやはや、信じがたいと言っしかあるまいな…私は村へ急ぐことに
した

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0317y/>

透明熊の手

2011年12月11日00時49分発行